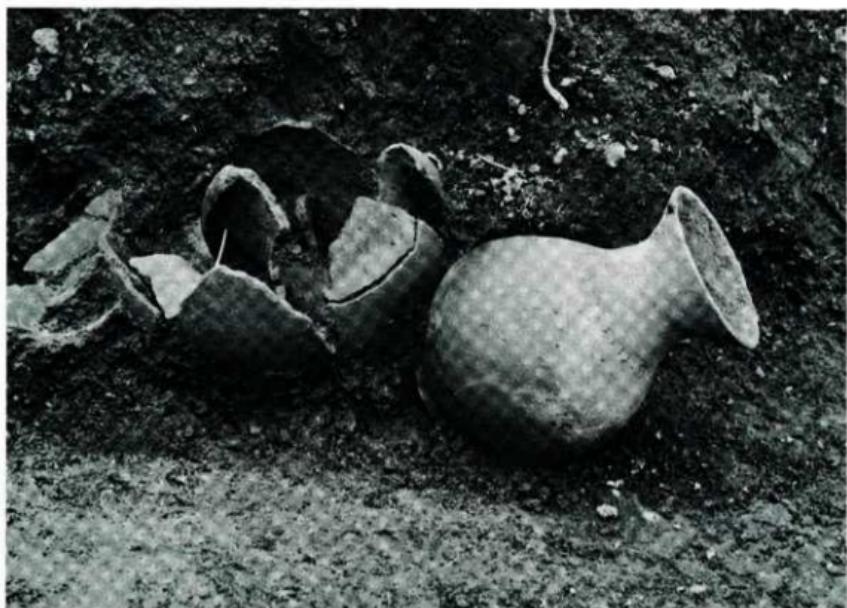


郷土史読本第1集

住吉遺跡

—弥生時代集落址の調査—



1981

甲西町教育委員会

序

住吉遺跡調査団長

清水千春

甲西町は遠く有史以前より、古代集落として栄えた郷で、町内各地には名所旧蹟等数多く散在し、嘗ては陝西文化の発祥地として、西郡の異名を以て世間一般に知悉せられているところで、従って、重要な遺跡、古文書、伝承等は、相当町内に散在していると思われるけれども、長い年月の間には、火災或は其の他の事故に依って散逸したものも少なくないと思います。

我々は、この祖先が營々として築き上げた文化遺産を無駄にすることなく、継承し、子々孫々に伝えて、豊かな郷土造りと、愛郷心の養成に資することは、我々此の地に生を享けたる者の、責務ではないかと思います。

今回、偶々郷社若宮神社の秋季例祭に当り、恒例に依り、織を建立すべく附近を掘鑿したるところ、弥生土器とおぼしき物が、発掘されたことが端緒となり、県文化課の指導を仰ぎながら、組織的に、本格的に発掘調査をしたるところ、後記の如く、予期以上の成果を収め、甲西町の古代史を解明する上に於て、貴重なる資料を得るに至りましたことは、誠に御同慶に耐えないところであります。

今後、更に挙って、古代文化の調査研究に勉め、甲西町文化の発展に寄与致し度いと思います。ここに住吉遺跡発掘調査に御協力を戴いた各位に対し、深甚の謝意を表し、序に代える次第であります。

例　　言

1. 本書は、昭和55年3月30日から4月9日まで発掘を行なった、山梨県中巨摩郡甲西町住吉遺跡の調査報告である。
2. 本書は、分担執筆とし、執筆者名は分担ごとに文末に記した。
3. 本書の編集は、甲西町文化財審議会の協力を得て新津 健、新津 茂が行なった。

目　　次

序	住吉遺跡調査団長　清水千春
例　　言		
はじめに	5
1. 調査に至る経緯と概要	7
2. 遺跡の層序	11
3. 発見された遺構、遺物	11
〔遺　構〕		
(1) 第1号住居址	11
(2) 溝状遺構	15
(3) 1号土壙	17
〔遺　物〕		
(1) 第1号住居址	18
(2) 溝状遺構	22
(3) 1号土壙	23
(4) トレンチ内出土土器	23
(5) 参考資料	25
4. 遺構、遺物の検討	26
(1) 土　器	26
(2) 遺　構	32
あとがき	甲西町文化財審議会長　杉山松雄

はじめに

最近、金生遺跡や駿河堂遺跡をはじめとし、県内各地でさかんに発掘調査が行なわれており、貴重な発見が相次いでおります。新聞紙上にも連日、発掘に関する記事が掲載されていると同時に、人々の間にも、考古学や古代史に対する関心が、たかまつてあります。

ところで、甲西町内にも縄文時代から中世に至るまでの貴重な遺跡が数多く知られております。秋山にある土居平遺跡(第1図②)は縄文時代前期(約5,500年前)、中期(約4,500年前)から弥生時代(約2,000年前)を経て、古墳時代(約1,500年前)までの遺跡として、古くから注目されております。塚原地内の豊塙場遺跡⑥も、縄文時代前期、弥生時代、古墳時代の遺跡ですが、特に縄文時代早期後半(6,000年前)の土器片も採集されています。又、湯沢の御前山⑩や塚原、上の東地区⑦には、弥生時代から古墳時代の遺跡があります。これらは、甲西町内でも高台の落合地内に位置する遺跡ですが、標高の下った大井、五明地区には、弥生時代や古墳時代、更には奈良、平安時代に至る大規模な遺跡が知られております。江原の久保沢遺跡④からは、古墳時代の壺や高杯などがたくさん発見されており、そのほか、下宮地滝沢通り⑤、鶴沢③、清水⑨などの地区からも、この時代の土器が採集されています。

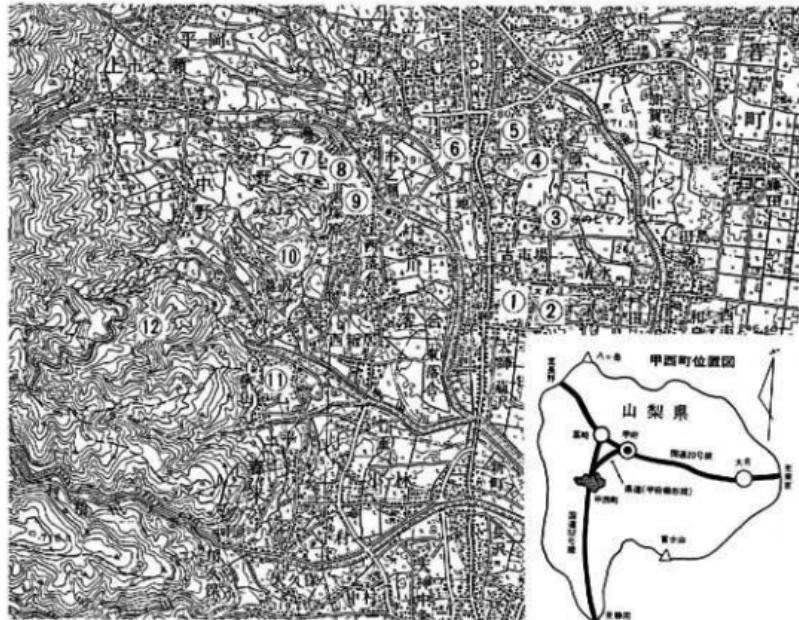
一方、古墳は、町の文化財指定をうけている塚原上村の通称「大西のおかま」⑩という円墳をはじめとし、秋山熊野神社⑪、下宮地地内等に数多く残っています。特に塚原地内には、その名の示すように、曾ては相当数の古墳があったようです。又、下宮地地内では、御崎神社周辺⑫に積石塚といい、石を小山のように積み上げて造った塚がたくさんあります。この種の古墳も、昔はこの地に相当数みられたようですが、最近の宅地化や道路工事などで徐々になくなっています。

そのほか、田島地区を中心とした一帯には、古代の条里遺構が埋没しているとも伝えられています。

以上のように、甲西町内には、高台、微高地、そして低地というそれぞれの地形に適した各時代の遺跡が数多く知られているのです。

このような分布状況の中で、住吉遺跡は、甲西町のほぼ中央部の古市場に位置する弥生時代後期(約1,800年前)の遺跡です。今回は、遺跡のほんの一部が発掘されたにすぎませんが、報告書で述べられているように、住居跡とともに、たくさんの土器が発見され、相当大規模な遺跡であることが判りました。今後の調査で、当時の村の様子が、徐々に解明されていくことが期待されます。

ところで、弥生時代とはどんな時代を指すのでしょうか。一般には、弥生式土器の使用された、紀元前3世紀頃から紀元後3世紀頃までの、500年間続いた時代を指しています。つまり、今から2,200年から1,800年前の時代です。それまで1万年程の長きにわたって続いた縄文時代は、普通、狩猟・採集という方法により、食物を得ていた時代とされています。ところが、弥生時代になると、青銅器や鉄器などの金属器の使用や、稻作農耕の開始に代表される新しい文化が、大陸からの影響で興ってきます。もちろん、この新しい文化が、日本全国すべてに同時に行きわたった訳ではなく、西日本に弥生文化が拡まった頃、東日本では、まだ縄文時代が続いていまし



第1図 住吉遺跡(①)と周辺の遺跡(1/50,000)

た。又、弥生時代に入ったからと言っても、縄文時代のような石器も使用されていましたし、狩猟や採集も当然行なわれていた訳です。あくまでも、文化の特徴的な要素が、金属器の使用や、稻作農耕の開始及び定着にあったと考えた方がよいでしょう。

山梨県の場合、弥生時代中期頃から遺跡が発見され始め、後期になると数が多くなります。たとえば、そのうちの1つ、敷島町金の尾遺跡は、中期末から後期初頭の遺跡としてよく知られています。この遺跡からは住居跡32軒、周溝墓17基が発見され、同時に炭化した米が住居内から出土した例もあり、稲作の波及していたことが判ります。町内にも先に述べたように、上ノ東遺跡、御前山遺跡、住吉遺跡など、弥生時代後期の遺跡は比較的多く知られています。

さて、この時代の住居は、縄文時代同様に、竪穴式住居が一般的です。これは、地面に深さ30~50cm、1辺（あるいは長径）5m前後の長方形（あるいは梢円形）の大きな穴（竪穴）を掘り、底面に草や編物などを敷き、床とした住居のことです。これに柱を建て、草などで屋根を葺いた住居は、静岡県登呂遺跡等に復元されており、よく知られています。住居の中には炉が設けられており、長い期間火の焚かれていた様子がうかがわれます。又、この時代になると、高床式の建物も出現しますが、主に穀物を収納した倉庫と考えられています。

住居内を調査しますと、壺、甕、台付甕、高坏、壺などの形をした土器が出土します。これら

の土器には、それぞれの用途があります。壺は、種子の保存、貯蔵に使用されたほか、高坏と同様、供獻用（祭祇用）にも用いられています。合付壺は、煤がたくさん付着している例が多いことから、炉にかけられ、煮たきをするのに用いられたようです。そのほか、日常の食事に使われたと思われる容器もありますし、水壺のような大きな壺もみられます。つまり、現在の私達の生活の基本は、この時代に出来上がっていたとも言えるのです。

考古学とは、主に、文字による記録のない時代、又は、文字があっても、記録として残らない歴史を解き明かす学問の分野です。発掘調査という手段により資料を収集し、そして考え、人間の歴史をたどっていく学問なのです。どんなに小さな調査でも、それらを積み重ねることにより、今までわからなかった歴史が解き明かされていくのです。そういう意味からも、今回の住吉遺跡の発掘調査記録も、大きな成果を挙げたと言えましょう。

それでは、これから住吉遺跡の調査記録に入っていきましょう。

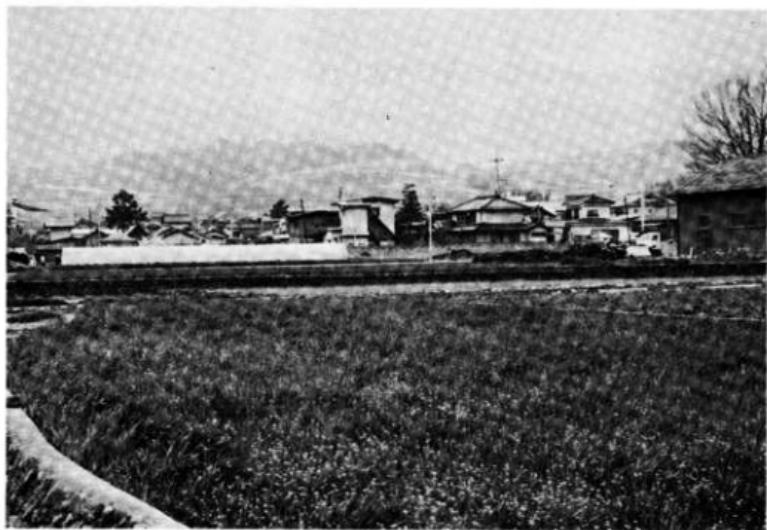
（新津 健）

1. 調査に至る経緯と概要

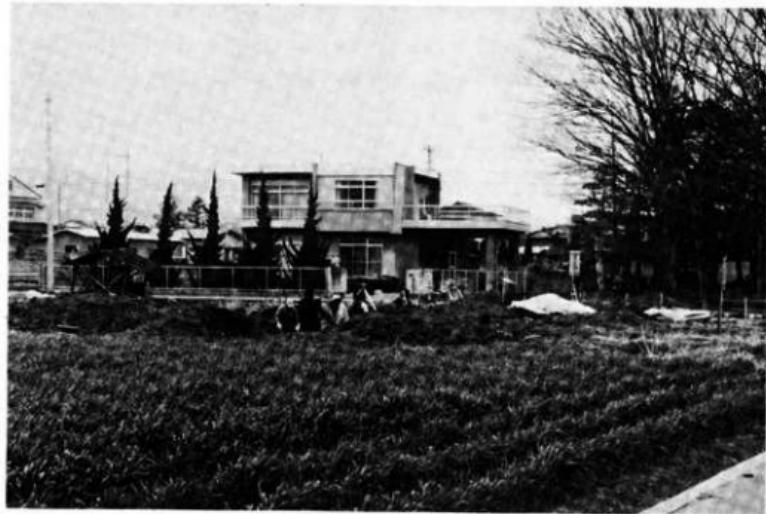
住吉遺跡は、山梨県中巨摩郡甲西町古市場字住吉の標高約250mの微高地に位置する。この付近は、旧名大井村と称し、大、小の湧水が数多くみられ、又、隣接する五明地区にも清水という地名が残されているほど、水の豊富な地域として知られている。この地一帯は、一見平坦地のようであるが、地形を詳しく観察すると、湧水を源として流出する小さな河川と、わずかな高まりを有する微高地とが交互に入り組んでいる様子が判る。このような微高地から、特に弥生時代から平安時代にかけての土器が数多く発見されている。下宮地（深沢通り）、江原（久保沢）、鮎沢、清水等の遺跡がそれである。

さて、住吉遺跡の発見は、昭和54年9月14日、古市場の深沢嘉甫氏が、若宮神社の秋季祭典にそなえ、のぼりを立てるための穴掘り作業中に土器を発見したことに起因する。土器発見の報は、町教育委員会塩沢忠係長、町文化財審議会杉山松雄会長を経て、新津に伝えられた。翌15日、現地の観察を行なった結果、土器は6個体あり、いずれも弥生時代末頃のもので、地表下約1m程の砂層上から出土したことが判った。土器の出土状況からして、住居址等の遺構が埋没していると思われ、その旨を、塩沢係長及び文化財審議会の方々に伝えた。その後、教育委員会、文化財審議会を中心に、本遺跡の本格的な発掘調査が検討され、10月31日、調査団組織並びに予算等の大綱が決定された。以来、同年11月19日、翌年の昭和55年2月29日の文化財審議会を経て、3月12日関係代表者の協議会に依り、3月30日から4月初頭にかけて調査を行なうことと決定した。

調査は、荒沢の長沼建夫氏所有の休耕田600m²内に、直交する幅2mのトレーンチ2本を設け、遺構の拡がり及び上層の状況の確認を行なった。同時に、深沢嘉甫氏により発見された土器の出土地点に隣接する部分を拡張し、精査を行なった。この結果、土器出土地点は、住居址内の中央部よりやや北側に当ることが確認されたが、住居は道路及び水路下にも拡がるため、完全なる發



遠跡遠景



遺跡近景（右端 若宮八幡社）

掘ができなかった。そのほか、溝状造構2本、平安時代の土壙1基が発見された。以上のように住吉遺跡は弥生時代及び平安時代の遺跡であることが判明した。

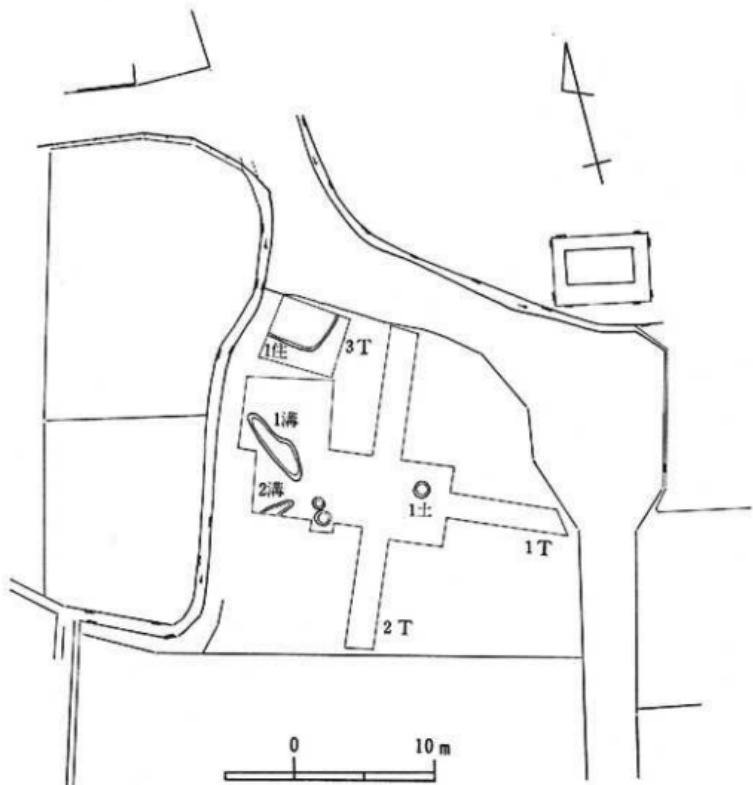
〔調査経過〕

- 昭和55年3月30日(日) 鍵入式、トレーニング設定、重機による表土剥ぎ。トレーニング内掘り下げ。
31日(月) 第1トレーニング内にて黒色土の落ち込み発見。掘り下げる。
4月2日(水) 第1トレーニング北側隅にて黒色土の落ち込み検出。拡張する(1号溝)。
3日(木) 1号溝調査(塁2個体出土、炭化材もあり)、2号溝発見。
4日(金) 1号溝、2号溝掘り上げ。第3トレーニング拡張(1号住居址)。
5日(土) 1号溝、2号溝写真撮影、実測、1号住居址拡張。
6日(日) トレーニング土層図、溝実測、1号住居址拡張。
7日(月) 1号住居址範囲確認、掘り上げ(土器8個体出土)。
8日(火) 1号住居址写真撮影、実測。全体測量図。
9日(水) 埋め戻し。

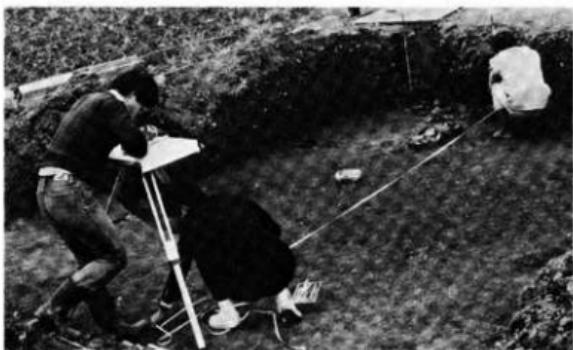
(塙沢 忠、新津 健)



発掘中の遺跡



第2図 全体図 (1/400)



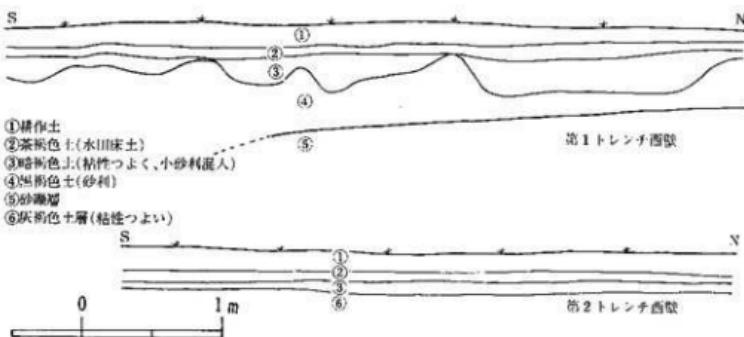
実測風景

2. 遺跡の層序（第3図）

遺跡の標準的な土層は、第1トレンチ西壁で観察すると、上位から下位に向って、①耕作土、②水田床土、③暗褐色土（小砂利混入）、④黒褐色土（砂利混入）、⑤砂疊層の順に堆積している。このうち③層、④層が遺物包含層であり、④層から⑤層に遺構が掘り込まれている。住居址、溝は④層中に床があり、土壌は⑤層中に掘り込まれている。

この層序は、発掘区内全体に共通するものではなく、発掘区東半分の地区では、③層下部以下には、大小の疊からなる層が発達している。この砂疊層中からは非常に多くの上器片が出土するが、一定の形状を呈する遺構は、土壌を除いて、検出されなかった。旧河川の跡、あるいは氾濫の跡かもしれない。

（新津 健）



第3図 遺跡の層序 (1/40)

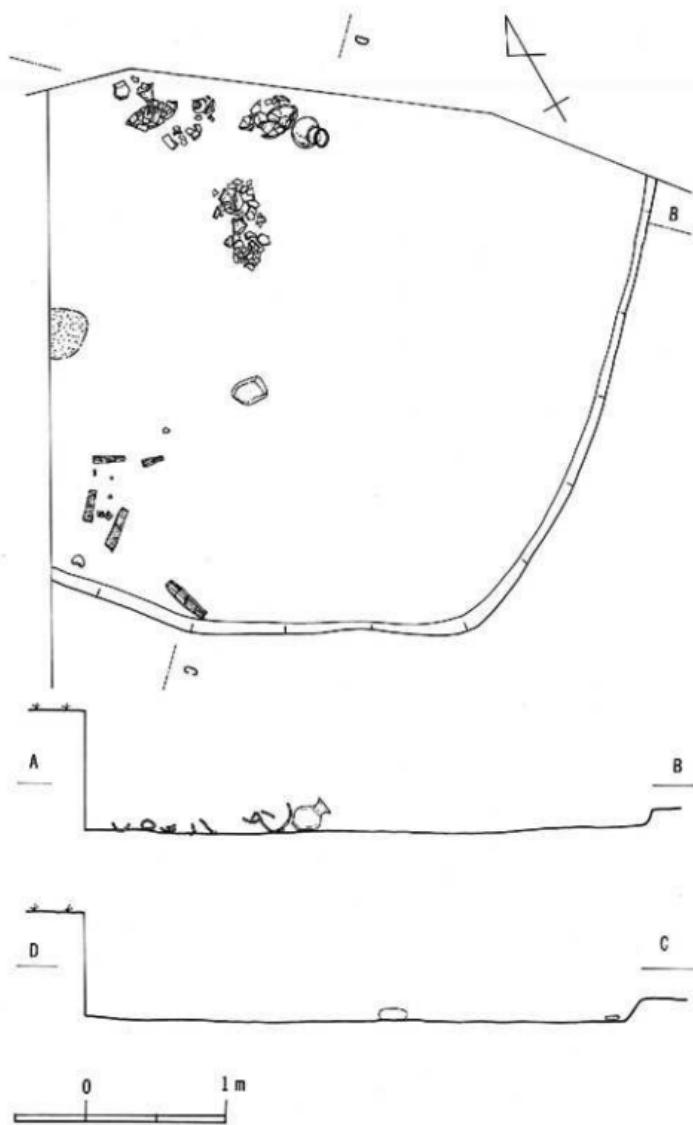
3. 発見された遺構、遺物

調査の結果、住居址1戸、方形周溝基の可能性ある溝2本、土縄3口が発見された。但し土壌については、1号上壤以外、浅いもので性格はよく判らない。以下、遺構、遺物の順に説明する。

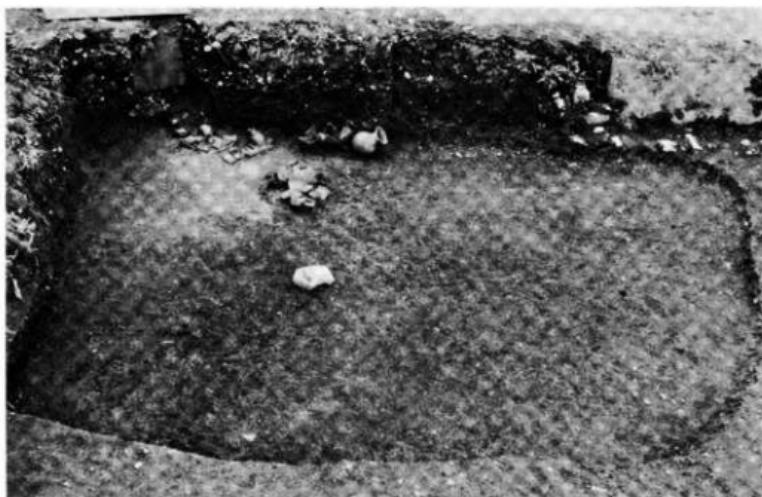
【遺構】

(1) 第1号住居址（第4図）

発掘調査区の北隅に位置する。北側に道路、西側に水路があることから、完全な形での調査はできなかった。住吉遺跡発見の端緒となった土器は、この住居から出土したものである。住居は、1辺が5m前後の隅円長方形を呈するものと推測される。砂利を混入する黒褐色土層中に掘り込まれており、床はさほど堅くなく、柱穴もはっきりと判らなかった。床面上の、西に偏っ



第4圖 第1号住居址実測図 (1/40)



第1号住居址全形



土器出土状況

たところに、僅かながら焼土が認められたが、炉址とするには、やや不明瞭である。むしろ、
がの位置は、未調査部分である道路下かもしれない。南西側の壁ぎわには、炭化材が数点みられ
た。住居の屋根材が焼け落ちたものであろう。

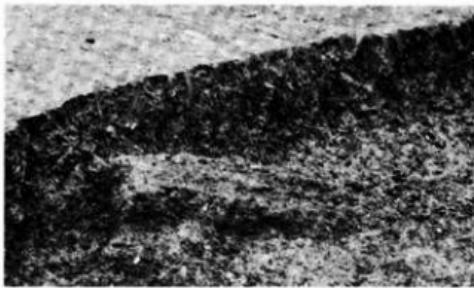
出土遺物としては、形の復元できる土器が、20点程ある。壺12点、甕3点、台付甕4点、高付
1点である。これらは、住居床面から出土したものである(第7~9図)。



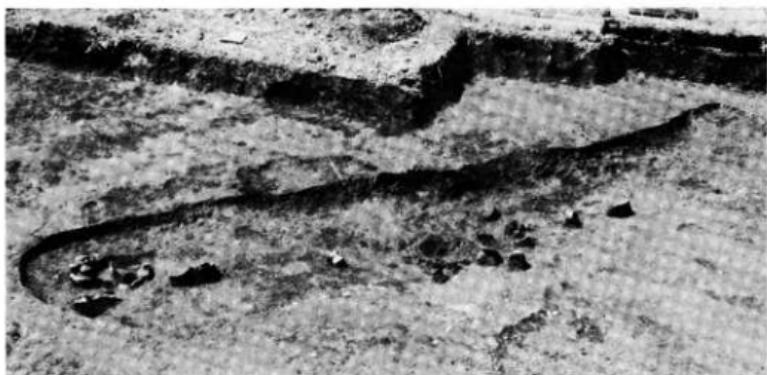
第1号住居址土器出土状况



高环形土器出土状况



炭化材出土状况



第1号溝

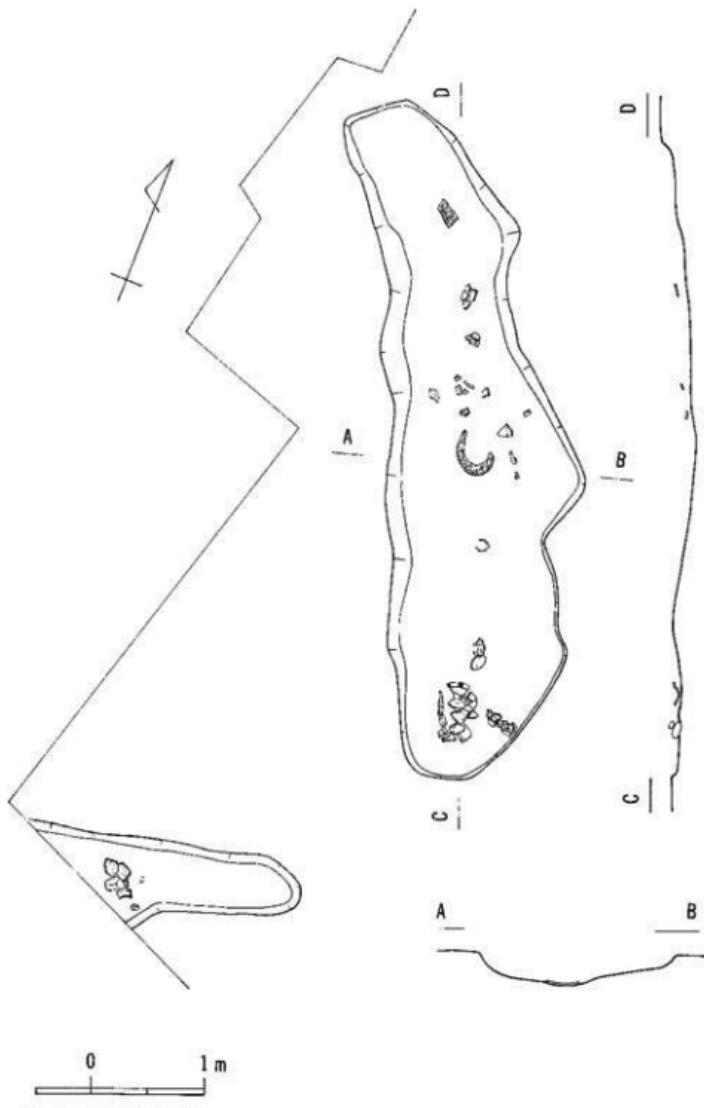


(2) 溝状遺構（第5図）

住居の南側約6mのところに、2本の溝が発見された。1号溝は完全に調査できたが、2号溝は大半が西側水田下にのびるため、全体の様子は不明である。この2本の溝は、直交する状態で発見されており、方形周溝墓の一部である可能性がつよいが、西側の水田下を調査しなければ詳細な検討はできない。

1号溝は、長さ6m、幅80cm~1.6m、検出面からの深さ20~30cmを測る。長軸上の両端が浅く、中央に行くに従い徐々に深くなっている。各辺の壁の立ち上がりはゆるい。南隅付近からは、胴下半部を欠損している壺形土器が2点出土している。又、炭化材2点、及び容器状の炭化物1点も出土した。

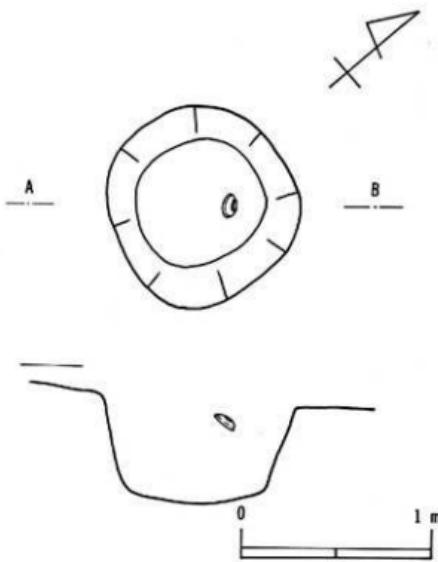
2号溝は、ごく一部が調査されたにすぎないが、状況は1号溝と同様である。



第5図 滝状造構 (1/50)

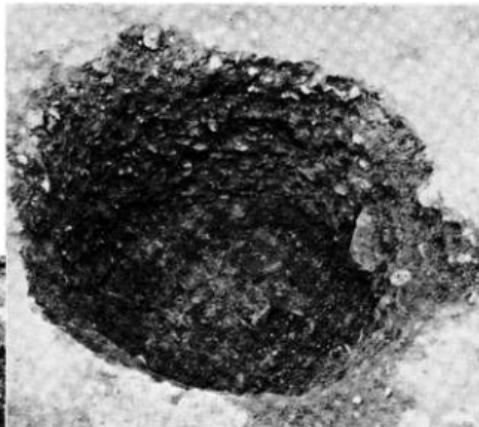
(3) 1号土壙 (第6図)

溝状遺構の東側約8mに位置する。この付近は砂利層が厚く堆積しており、土壙はこの砂利層を掘り込んでつくられている。直径約1m、深さ60cmの円形を呈し、内部には、小砾を混入する黒色土が堆積していた。埋土上面からは、平安時代とみられる壺形土器の完形品が1点出土した。



第6図 第1号土壙 (1/30)

第1号土壙



第1号土壙内出土土器

〔遺物〕

(1) 第1号住居址 (第7~9図、第12図)

図示した22個体の土器を始めとし、破片及び炭化材等が出土した。以下番号順に説明する。

壺形土器

第7図1、口縁部が3分の2程欠損している小形壺である。胴下半に最大径があり、その部分が稜をなしている。色調は赤褐色を呈し、胎土には砂粒が混入している。焼成良好。頸部外面には刷毛目が明瞭である。

2は、短頸の小形品である。色調は赤褐色を呈し、胎土には雲母、石英、長石粒が混入している。器面は荒れていて整形痕は認められない。底部一部欠損。

3、最大径が胴中位よりや下にある整った形状の完形品である。色調淡褐色で、胴下半部は赤味を増している。焼成良好。肩部に櫛齒状工具による平行沈線と扇形重弧文とが施されている。内、外とも刷毛目が顕著である。

4、胴部の一部を欠くがほぼ完形品である。工事中発見されたものである。色調は、胴上半部から口縁までの外面は明褐色、胴下半部は暗褐色を呈する。胎土中には砂粒が混入し、焼成良好である。口縁及び頸部外面には刷毛目がみられる。胴部外面上半は縱方向に、下半は横方向に、それぞれ窓で磨かれている。頸部から肩部にかけての部位に刺突文が連続する。口縁折り返し部には指頭の圧痕が残されている。胴下半に稜を有する均整のとれた器形である。

5、頸部以上を欠損する。胴部はやや扁球状を呈し、下半最大径の部位に稜がある。色調明褐色、焼成良好。内・外とも刷毛目が顕著であるが、外面は更に窓による磨きが加えられている。

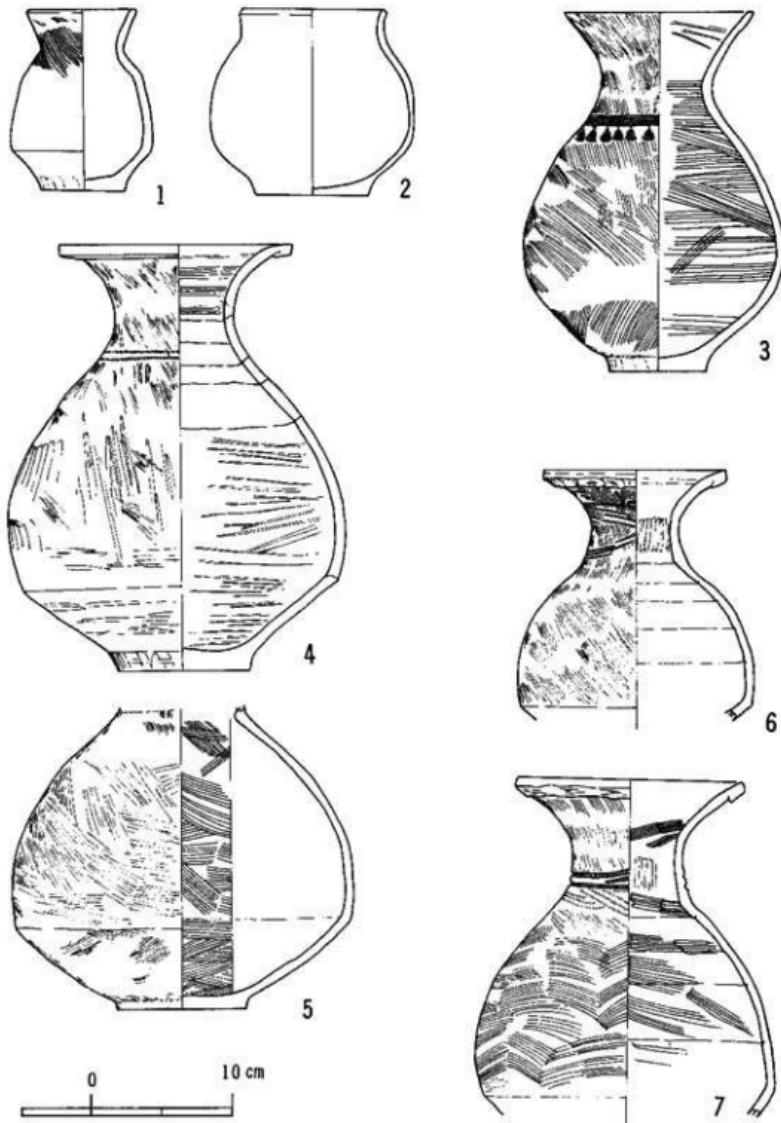
6、7とも工事中発見されたもので、法量は異なるが、器形は類似している。两者とも胴下半に最大径があり稜である。いずれも底部を欠損する。頸部から肩部にかけて、6は、窓による沈線、7は、櫛齒状工具によると思われる連続刻目が付けられている。全体に刷毛目が著しいが、6の内面には輪積み痕が残る。色調はいずれも茶褐色を呈し、胴下半には黒色斑が認められる。特に7の内、外面には煤状の炭化物が付着している。

第8図8は、複合口縁の部分だけ残る破片である。色調は赤褐色を呈し、胎土には石英粒等の砂粒が含まれる。焼成良好。内、外とも刷毛目が残る。口縁部に煤が若干付着している。

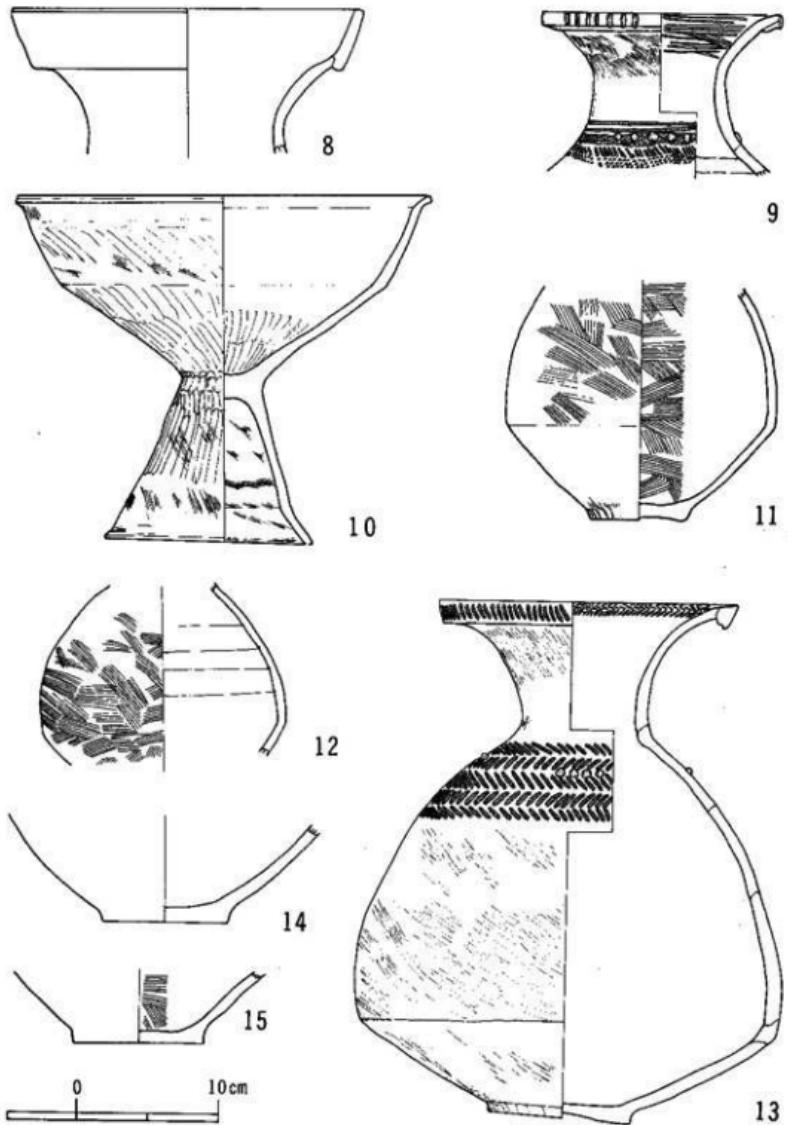
9、口縁から頸部にかけての破片。色調は赤褐色を呈し、焼成良好。口縁内、外面とも刷毛目明瞭。折り返し口縁で櫛状浮文が4ヶ所に付けられている。その浮文は遺存する3ヶ所によると、単位が6本、7本、8本と左回りに順次増えていく。肩部には、櫛齒状工具による擬似羽状繩文が施され、その上に1単位5個の円形貼付文が4ヶ所に認められる。内面頸部以下には輪積み痕が残る。

11、12は、いずれも胴部だけである。色調は赤褐色を呈し、胎土中に小石、石英、長石等を混入する。焼成良好。いずれも胴下半部に稜を有する。刷毛目が顕著であるが、11は窓で磨かれており、部分的に光沢がある。12の内面には輪積み痕がある。

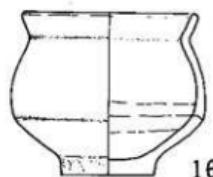
13、口縁の一部を欠損するが、ほぼ完形である。強く外反する口縁、下半部に最大径のある局



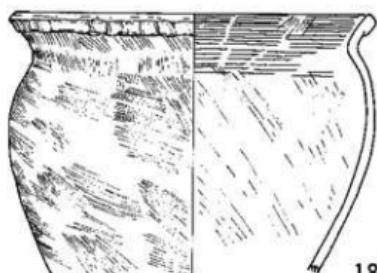
第7図 住居址出土土器実測図(1/4)



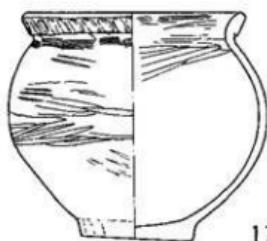
第8図 住居址出土土器実測図(1/4)



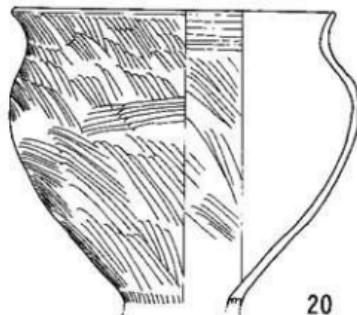
16



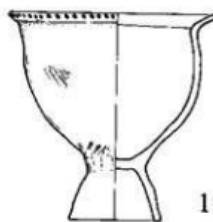
18



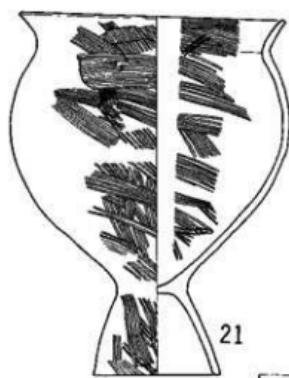
17



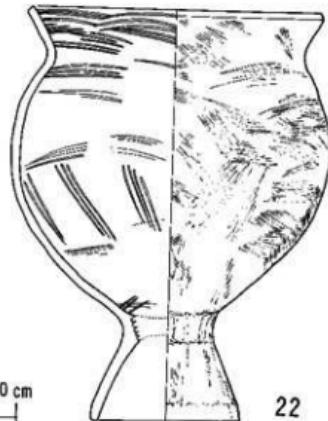
20



19



21



22

第9圖 住居址出土土器実測図 (1/4)

球状をした胴部が特徴的である。口縁内面及び肩部には羽状繩文が施されており、更に、4ヶ1単位の円形浮文が4ヶ所に、それぞれ付けられている。他の部分には刷毛目が顕著で、更にその上は笠で磨かれている。色調明褐色を呈するが、全体にやや磨滅している。底部には木葉痕が認められる。

14, 15は底部破片である。

高環形土器

第8図10、ほぼ完形品。住居の床面に、つぶれた状態で出土した。坏部は深く、中央に稜がある。色調は赤褐色を呈し、胎土中に石英、長石粒を多く含む。やや脆く器面が磨滅している。刷毛目が部分的に残る他は、笠で磨かれており、特に内面はていねいに仕上げられている。

変形土器

第9図16、工事中に発見された、3分の1程を欠損する小形の変形土器であるが、塊形に近い形状を呈する。口縁はやや内弯気味に立ち上がる。色調明褐色を呈し、器壁は磨滅している。

17、底部内面が若干剥離しているが、ほぼ完形である。赤褐色を呈し、焼成良好。折り返し口縁で、外面には指などによる圧痕がある。内、外面ともていねいに笠で磨かれているが、特に内面は顕著である。

18、胴下半部欠損。折り返し口縁外面には、指頭による圧痕が連続する。明褐色を呈し、胎土はやや脆い。外面には10木単位の刷毛目が明瞭で、内面は刷毛目の上をなでにより調整している。

台付壺

19は、3分の1程を欠損する小形品である。砂粒を含み、しかも磨滅しているため、器面はザラザラである。明褐色を呈する。口縁部には刻目が連続する。

20、台及び全体の3分の1程を欠損する。肩の強く張った形状を呈する。胎土は緻密で、外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈する。胴部外面上半に煤のような炭化物が多く付着している。内外面とも刷毛目が著しい。

21、口縁を3分の2程欠くが、ほぼ完形品である。焼成良好で器壁は薄い。外面には煤が、わずかながら付着している。黒褐色を呈し、胎土中には細かい砂粒が含まれる。

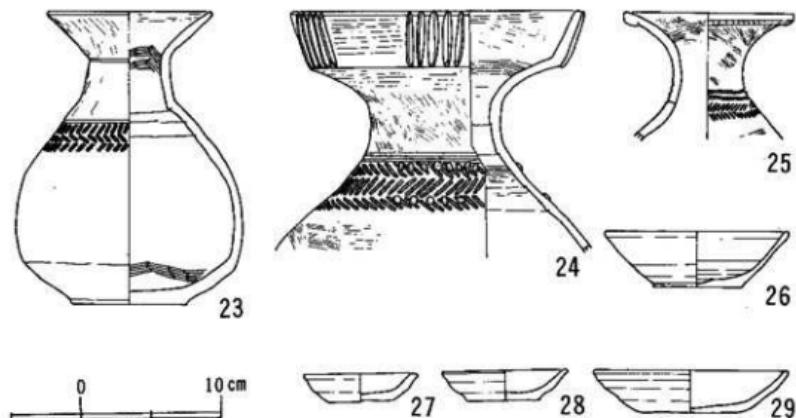
22、4分の1程を欠き、底部も欠損している。球形に近い胴部で、全体に均整がとれている。明るい褐色を呈し、焼成は良い。外面は、部分的に煤が付着している。内面は刷毛目の上を笠で磨かれている。

第12図20、破片であるため詳細は不明であるが、変形土器の口縁部の可能性がある。櫛歯状工具による波状文、平行沈線文等が特徴である。

(2) 溝状遺構（1号溝）（第10図、第11図）

変形土器

第10図24、胴部以下を欠損する。赤褐色を呈し、胎土には石英、長石小粒を多く含んでいる。接合資料から、胴下半部に最大径があり、その部分が腰をなす器形である。複合口縁外側に5本



第10図 溝、土壙、トレンチ出土土器実測図 (1/4)

1 単位の棒状浮文が5ヶ所に付けられている。肩部には羽状繩文及び円形浮文2段3単位がみられる。内面及び外面の無文部には刷毛目が認められる。

25、頸部以下欠損。赤褐色を呈し、焼成良好で堅い。折り返し口縁の外側には指頭圧痕がみられる。頸部には櫛歯状工具による連続する刻目文と、羽状擬似繩文が付けられている。

第11図1～7は溝中の埋土内から出土した破片である。1、2、3は壺の肩部破片であり、櫛描きの横線、扇形重弧文が施されている。4も肩部破片で擬似繩文が羽状に付けられている。5～7は細かな繩文が施されたものである。5は肩部から頸部にかけての破片で、円形の貼付文がみられる。

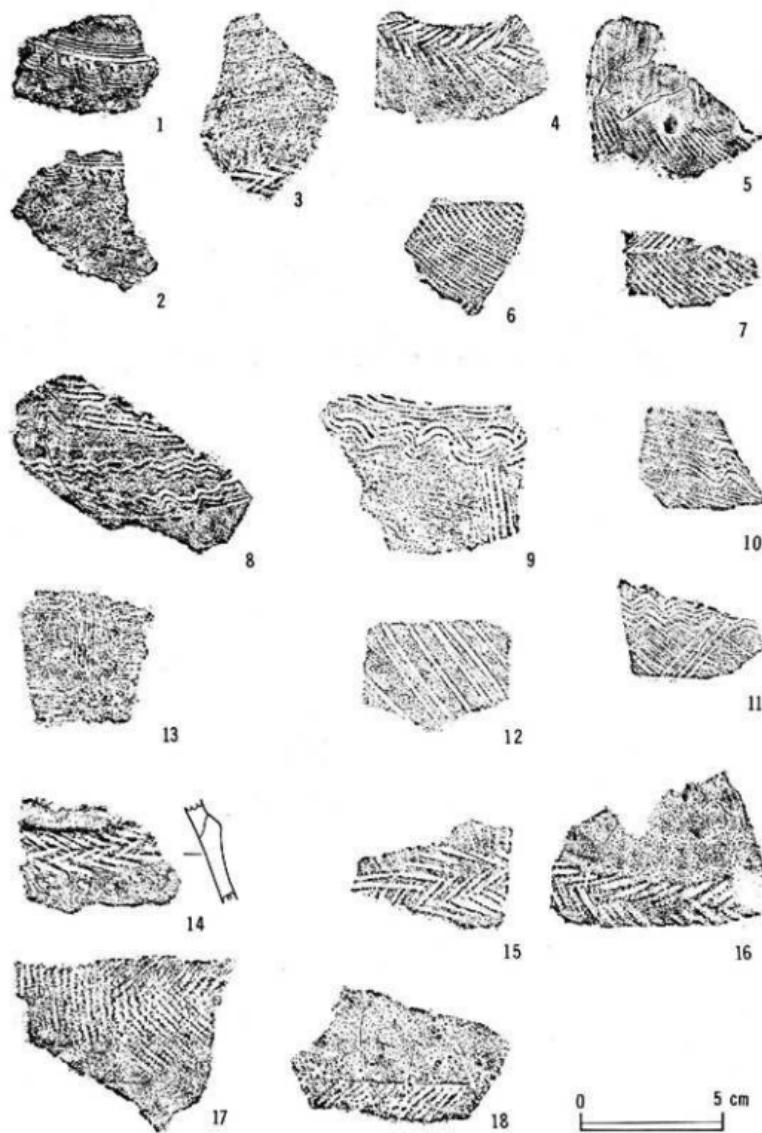
(3) 1号土壙 (第10図)

29は、土壙埋土上部から出土した土師器壺形土器である。赤褐色を呈し、砂粒を混入する。焼成良好。ロクロ水引き痕が明瞭で、底部には回転糸切り痕がみられる。

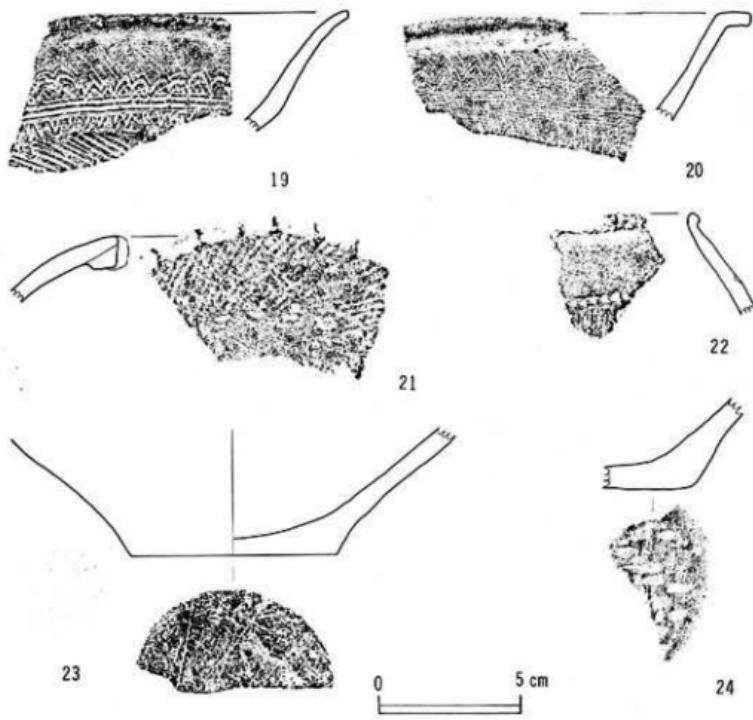
(4) トレンチ内出土土器

弥生式土器 (第11図、第12図)

第11図8～11は、櫛描きの平行線、波状文の施されたものである。12は、刷毛目痕を地文とし斜方向の平行線が施され、胎土には金雲母が多く含まれる。色調は黒褐色で焼成良好である。13には極めて浅く細い櫛描き文が施されており、縱方向の平行線をはさんで対象に流水文風の線文を描いている。14は、櫛状工具による斜線と扇形重弧文が施されている。15は擬似繩文である。16～18は繩文が施されている。第12図19は、高壺の壺部破片と思われ、櫛描きの横線、斜線、波状文などがみられる。21は、折り返し口縁をもつ壺の口縁部破片である。口縁部には棒状隆起があり、外面には刷毛目痕、内面には繩文、扇形重弧文が施されている。22は無頸壺の口縁部破片



第111図 出土土器拓図 (1/2)



第12図 出土土器拓図 (1/2)

であり、列点や鋸歯状の線文がみられる。23、24は底部の破片である。23には木葉痕が、24には網代痕が残されている。

土師器及び土師質土器（第10図）

第10図26は、平安時代に属する土師器である。3分の1程を欠く。赤褐色を呈し、焼成良好で堅い。若干、玉状口縁で、底部には回転条切り痕が残っている。

27、28は中世に多くみられる土師質土器（かわらけ）である。いずれも胎土中に砂や金雲母を多量に混入している。底部には回転条切り痕がみられる。

(5) 参考資料（第10図23）

図示したものは、住吉遺跡の近隣地区から出土した壺形土器である。全体の3分の1程を欠損する。下半に稜のある胴部から徐々につぼまり、やや内傾した頸部を経て、外傾して開く口縁の土器である。肩部には羽状の擬似鉢文が施されている。内面及び口縁から頸部にかけては、刷毛目が残るが、全体によく磨かれている。赤褐色を呈する焼成良好な土器で、堅い。

（新津 茂、山下孝司）

4. 遺構、遺物の検討

(1) 土器

今回の調査では、器形の判る土器が20数点出土した。壺、甕、台付甕、高壺などの器種がみられ、特に1号住居址中からは、セットとみられる種類の土器がまとめて出土している。これらの特徴について簡単にまとめ、編年的な位置付けについて考えてみたい。

壺形土器

器形の判る土器は、全て胴下半部に最大径があり、そのうち第7図3を除いて、その部位に明瞭なる稜が認められる。口縁部の状態には、単純口縁、折り返し口縁、複合口縁の3種がある。殆んどの個体には刷毛目が認められ、主な装飾的要素としては、繩文、梳状工具による沈線、櫛齒状工具による刺実文、擬似繩文、波状文などが施されている。これらについて、器形及び文様から分類してみよう。

1類、小平甕を分類した。

a種、単純口縁で、胴下半の最大径の部分に稜がみられる。頸部に刷毛目が残るだけである。

第7図1。

b種、口縁は余り外反せず短頸である。第7図2がこれにあたる。

2類、斜直して立ち上がる単純口縁で、最大径は胴下半部にあるものの稜は付かない。肩から胴上部にかけて、平行沈線及び、櫛齒状工具による扇形の重弧文が付けられているのが特徴である。第7図3、第11図1、2も同類であろう。

3類、折り返し口縁で、沈線、連続刺実文等の施された土器

a種、頸部に櫛齒状工具によるとと思われる連続する刻目が付けられたもの。第7図4。

b種、頸部が直立気味に立ち上がり、外傾して聞く口縁の土器。頸部に沈線や連続刻目が付けられている。第7図6と7とは、ひじょうに類似した器形を呈する。胴部破片である第7図5、第8図11、12も本類に分類できよう。

4類、折り返し口縁で擬似繩文の付けられた土器

a種、第8図9、口縁に棒状浮文、頭部に櫛齒状工具によるとと思われる擬似繩文及び円形浮文が付けられている。

b種、第10図25、器形は3類b種に類似する。頸部から胴上部にかけて、羽状の擬似繩文が施されている。第11図4、15も同類であろう。

5類、折り返し口縁で、繩文の施された土器

第8図13は、下半有稜で扁球状の胴を呈する。羽状繩文、円形浮文が特徴的である。第12図21は、口縁内面の繩文帯下部に重弧文の痕跡が認められる。第11図5～7、16～18も本類であろう。

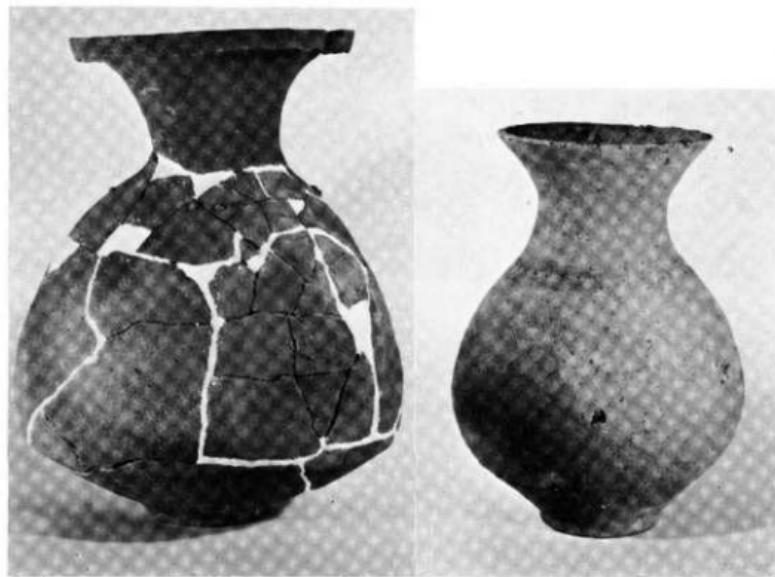
6類、複合口縁の土器

a種、第8図8、僅かに刷毛目が認められる。

b種、頸部が強くすぼまり、内面に関しては、口縁直下から頸部上端にかけての部位が平坦に



第1号住居址土器出土状況



壺形土器

近い。縦状浮文、円形浮文、羽状繩文等、装飾的要素が強い土器である。第10図24。

7種、櫛描波状文の土器。すべて破片であるため、壺の破片も含まれるかもしれない。

a種、振幅は小さいが、比較的太い波状文。第11図8。

b種、S字状の波状文。第11図9。

c種、細く、ゆるやかな波状文。第11図10、11。

d種、非常に細い流水文様の櫛描文。第11図13。

壺形土器

1種、単純口縁で無文の小型品である。第9図16。最大径は胴下半にある。壺形に近い。

2種、短頸で、折り返し口縁の土器。胴部は箆で良く磨かれている。最大径は胴部中位にあり、球形を呈する。第9図17。

3種、折り返し口縁で、最大径は胴上位にみられる。刷毛目が明瞭。第9図18。

台付壺

1種、第9図19、小型の台付壺。

2種、第9図20、短かく、やや外反する口縁部と、最大径が胴上半部にあり、若干肩の張った器形を呈する。

3種、第9図21、22、口縁は外反せず斜直する。最大径は、21は胴やや上部、22は中位で整った球形に近い。

高坏形土器

壺形の知れるものは1点だけであるが、坏部と思われる破片も数点出土している。

1種、第8図10、坏部中位に稜を有し、口縁は短かく「く」字形に外傾する。脚部はやや短かく、裾が若干開く。無文。

2種、櫛描波状文の施された土器。破片の為詳細不明であるが、坏部器形は1種同様中位に稜を有する。第12図19。

以上、壺、壺、台付壺、高坏形土器について観察してみたが、それぞれ、いくつかの特徴を窺い知ることが出来た。これらは時期的には一括として扱われるものである。以上の特徴から、編年的な位置付けを検討してみよう。

1号住居址出土土器

第7図4、6、7、第8図12、第9図16の5個体は、本遺跡発掘の緒となった工事中発見のもので、確定的ではないが、本址に属する一括品として取り扱って差し支えなかろう。即ち、壺12個、壺3個、台付壺4個、高坏1個が第1号住居址出土の一括資料である。

壺形土器は、全て胴下半部に最大径があり、2種（第7図3）を除いて、その部位が稜をなし

第1号住居址出土陶形土器，壺形土器



ている。かような種を有する特徴は、東海地方西部では中期後半から後期、同東部駿河地方では後期前半から後半、中部地方信濃川流域では後期後半に、それぞれ盛行するようである。1類とした小型壺は、器形上からは、長野県箱清水式に類似するが、口縁の状態、文様、赤彩の有無等で異なる。3類は、木造跡の主体的な土器であり、器形上からは沼津市「木松遺跡³⁾」に類例がみられる。

文様に注目すると、2類に特徴的な周状重弧文は、東海西部では中期後半から始まり後期に盛行するようである。同東部でも後期、中部高地の特に伊那地方では、後期後半にまで残るようである²⁾。擬似繩文を特徴とした4類は、駿河、遠江地方の後期前半に多くみられるとされる³⁾が、本址出土のa種は器形、文様構成から5類に似ている。5類は、折り返し口縁で、円形浮文、羽状繩文の土器であり、通常南関東地方の後期全般に発達する上器の特徴を有している。しかし木類の場合、東海地方との脈絡の強い器形を呈している。

壺形土器については、折り返し口縁の土器の例は比較的少ないが、2類とした土器は、沼津市「目黒身遺跡」に若干の類例がある⁴⁾。

台付壺では、1類とした小型のものは、やはり沼津市伴名田例に類似するが、非常に特徴的なものである。煮沸具としての木末の機能を有する台付壺とは性格の異なったものであろう。3類は、肩部が大分丸味を帯びており、後期でも後出的な要素が強い。

高环形土器は、本址から出土したものは、1類1点だけである。東海地方において、中期後半である。に半球形を呈する環部の高环がみられ、後期に入ると有稜の環部を持つ器種が出現する⁵⁾。又、長野県箱清水式でも同様の高环が特徴的である。本遺跡出土1類土器は箱清水式の要素が強いようである。同時に、住居址外出土である2類土器は、櫛描波状文が施されている点、東海地方西部との関連が考えられる。

溝状遺構出土土器

器形の判るものは図示した2点であり、それぞれ壺形上器4類b種、6類b種に分類したものである。4類b種とした第10図25は、羽状の擬似繩文である点を除いて、文様及び器形上の特徴から3類b種に酷似している。すなわち、本遺跡の壺形土器の主体を示す3類土器に擬似繩文が残ったとすることができようか。とするならば、住居と本遺構とは相当接近した時期の所産とすることができよう。この状況は、本遺構埋土中より出土した破片の中に、住居出土の2類土器の特徴である周状重弧文を持つものが含まれる（第11図1、2）点も参考になろう。羽状繩文及び円形浮文の施される破片についても同様である（第11図5～7）。

6類b種とした第10図24は若干特殊な土器である。肩部の羽状繩文及び円形浮文からは南関東後期後半的な要素が窺われるのに対し、破片接合資料からは明らかに胴下半部の最大径部分に稜を有するという器形上の特徴には、駿河地方の後期後半的な要素がみられる。一方、口縁部の形成方法及び内面平坦部の現われは、他の土器と比較して、後出的な要素であり、同時に供獻用としての機能も十分考慮される土器である。



第1号住居址出土圆形土器·宽形土器

こうしてみると、本遺跡出土の土器は、時期的に纏まとった一括資料とすることができるよう。その特徴には、東海地方西部、東部、長野地方、南関東地方等の後期の特性を若干ずつではあれ有することになる。そのうちでも特に東海地方東部一駿河地方の後期後半とされる1群の土器と強い脈絡が認められよう。すなわち、壺形土器3類、菱形土器2類、合付壺3類を主体とし、それに、やや前出的要素の残る4類、時期的には平行する南関東的な壺形土器5類、長野的色彩の残る壺1類a、及び7類、高环形土器1類、などを構成要素とした1つの様式に包括することができよう。

さて、住吉遺跡は、本県の從来の資料の中で、どのように位置付けられられようか。敷島町金の尾遺跡は、住居址32軒、方形周溝墓17基が発見された、弥生集落の数少ない資料の1つとして注目されている。ここでは、中期後半から後期にかけての資料が一部報告されている⁶⁾。完全な整理作業が済んでおらぬ為詳細は不明であるが、合付壺、複合口縁の壺、胴下半有稜壺はみられず、櫛描波状文で飾られた壺、甕、及び赤彩の施された小形壺、甕、高环などが構成要素の主体となっており、長野県中信、北信地方と脈絡を有するようである。これらの特徴は、住吉遺跡例には直接結び付かず、いくらかの開きがある。

一方、三珠町一城林遺跡の6軒の住居址及び溝中から出土した資料⁷⁾は、住吉遺跡例に近い様相を呈しながらも、装飾的要素の減少、器台形土器と思われる破片、複合口縁を有する壺形土器の多量化、合付壺の特徴、グリッド出土ながら小形丸底甕の伴出、等から、土師器的な様相を呈する1群として把配できよう。

又、方形台状遺構と称される遺構及びその上層から出土した中道町岩清水遺跡⁸⁾例、及び同下向山女沢遺跡採集の土器⁹⁾には、一城林遺跡にみられる後出的な様相は少なく、弥生時代終末期に位置付けられている。

従って、本地域における一括資料から観た場合、金の尾遺跡の一部を弥生時代後期前半、一城林遺跡を古墳時代初頭とすれば、住吉遺跡は弥生時代後期後半に位置付けられよう。その中で、岩清水及び女沢遺跡は一城林直前の後期終末期とすることができようか。しかし、金の尾遺跡と住吉遺跡との様相の差は大きく、その間に1型式想定せねばならない。尤も、長野地方の様相と東海地方の様相を持つ、それぞれの様式が時間的にどのような関係にあるのか解決されていない現在、問題は残る。すなわち、長野的色彩の濃い様相が継続して後期後半まで特定の地域に残るのか、あるいは、後半期になり、長野地方的な様相が大きく後退し、急激に東海的な様相に包括されていったのか解決されねばならない。

いずれにせよ、ここでは住吉遺跡を弥生時代後期後半という大きな区分の中に位置付けておきたい。

(2) 遺構

住 居

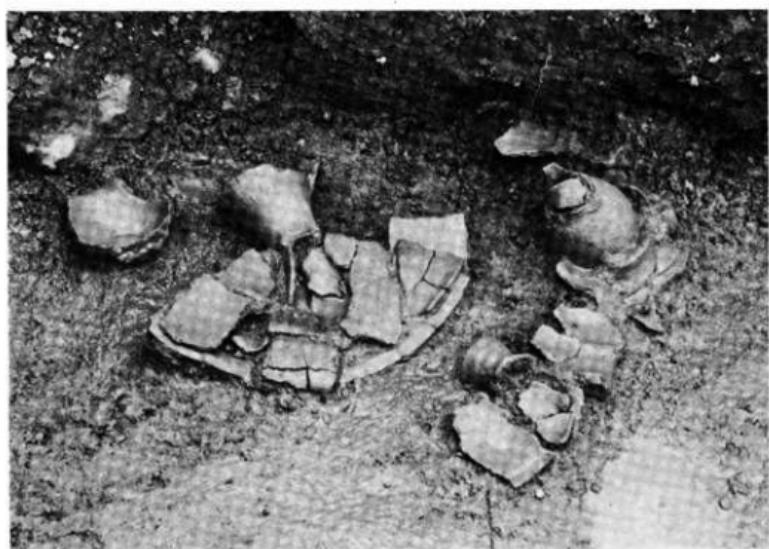
発見された住居址は1軒で、しかも完全に調査ができなかった。同時に調査された部分では、



第1号住居址土器出土状况



台付菱形土器



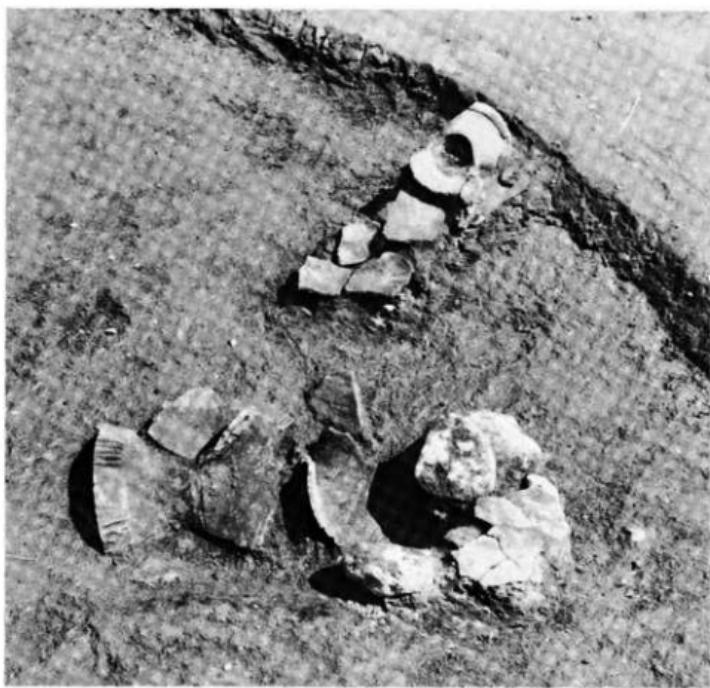
第1号住居址高环形土器、小形台付甌出土状況



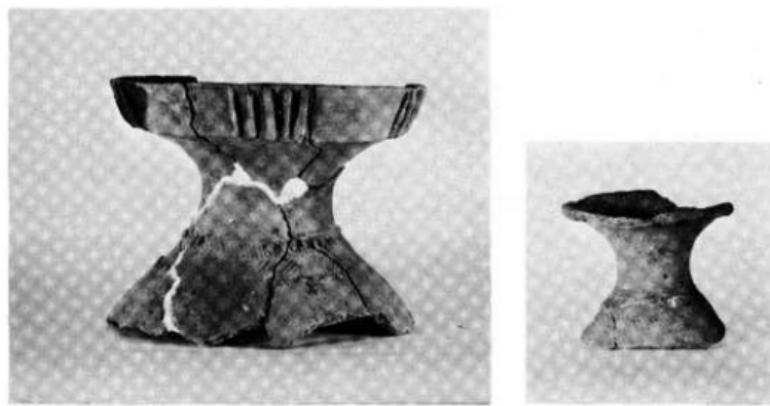
高环形土器



小形台付甌



第1号溝土器出土状況



臺形土器

明確にかと見做される施設及び柱穴とする小穴も検出できなかった。特に柱穴については、床面が黒褐色土であるため、落ち込みが不明瞭な点にも起因する。僅かではあるが壁際から炭化材が数点検出され、同時に焼土の散布もみられたことから、この住居は火災を受けたものであろう。規模は1辺が5m前後とみられ、各辺がやや直線的な隅円長方形を呈する住居と推定される。後期初頭に位置付けられている西田遺跡¹⁰⁾ A区1号住居は7.1m×6.6mの楕円形を呈し、後期前半として位置付けられている金の尾遺跡¹¹⁾では、最大8.2m×5.7m、最小1辺4m程度の隅円方形の住居が発見されている。一方、古墳時代初頭と思われる一城林遺跡¹²⁾ Y1住居は、6m×5.2mの長円形（あるいは胴が著しく張った隅円長方形）を呈している。南関東地方の弥生時代住居の平面形状に関しては、小判形、楕円形→割張り四円方形→隅円方形という時間的な変遷が把えられているが、本地域でも少ない資料からではあるが、概ねその傾向が窺われる。但し、一城林例は時間的には後出するものであり、異なった観点から把える必要があろう。

いずれにせよ、今次の調査では1軒の住居が発見されたにすぎないが、付近の地形から判断すると、まだ相当数の住居が埋没していると思われる木遺跡の性格の解決も含め、今後の調査に期待される点は大と言えよう。

溝状遺構

1号溝、2号溝は、直接つながらないが、直交する状態で発見されている。同時に、第10図24に図示したような、供獻的な要素の強い壺形土器が出土していることから、方形周溝墓の一部とする可能性がある。但し、2本の溝とも、立ち上がりがゆるく、しかも浅い点、及び1号溝中には、炭化物、炭化材がみられることは、単純に方形周溝墓とするには問題が残る。今回は、一部が調査されたにすぎず問題の解決は今後に残された。いずれにせよ、近年の調査では、金の尾遺跡のように、住居群と方形周溝墓群とが同一地域内からも発見されており、住吉遺跡においても、当然かかる点を念頭に置き調査を進めねばならない。

その他の遺構

発見された土器のうち、1基の埋土上部から平安時代末から中世にかけてとみられる环形土器が1点出土した。又、トレンチ内からは、中世の所産と思われる土師質土器（かわらけ）が数点出土している。これらから判断して、平安時代から中世を含む時代の遺構が付近に埋没していることも十分考慮せねばならない。発掘区北側には、現在、若宮神社があり、これにかかわる古い時代の遺構も十分想定されよう。同時に、戦国時代大井氏の拠点であったとされる富田城をこの付近の地に同定する考え方や、佃森といったこの地を性格付ける古名が残されており、土地に伝わる歴史性をも十分考慮して今後の調査を行なう必要性性があろう。

いずれにせよ、今次の調査は、試掘要素の強い第1回目の調査であり、いくつかの問題を提示したことは、大きな成果であったと言えよう。

(新津 健)

註

- 1) 瀬川裕市郎・他「二本松遺跡の土器と方形周溝墓」沼津市歴史民俗資料館紀要2, 1978.
- 2) 笹沢 浩「弥生式土器一中部高地3-1」考古学ジャーナル134, 1977.
- 3) 小野真一「弥生式土器一東海東部3-1」考古学ジャーナル129, 1976.
- 4) 註3)に同じ。
- 5) 紅村 弘「弥生式土器一東海西部3-1」考古学ジャーナル122, 1976.
- 6) 末木 健・他「山梨県中巨摩郡敷島町金の尾遺跡発掘調査中間報告」長野県考古学会誌第33号, 1979. 「山梨県敷島町金の尾遺跡調査報告書」長野県考古学会誌第36号, 1980.
- 7) 森 和敏・他「一城林遺跡一弥生時代末期集落の発掘調査報告書」山梨県教育委員会, 1980.
- 8) 森 和敏「岩清水遺跡試掘調査報告書一弥生時代末葉の遺構」山梨県教育委員会, 1979.
- 9) 山崎金夫「中道町下向山女沢遺跡表面採集の弥生式土器について」甲斐考古11-1, 1974.
- 10) 山崎金夫「西田遺跡第一回発掘調査報告書」山梨県教育委員会, 1978.
- 11) 註6)に同じ。
- 12) 註7)に同じ。

あとがき

住吉遺跡調査團副團長(甲西町文化財審議会長)

杉山松雄

近年来、県下各地に於いて、古代遺跡の発掘調査が行われ、埋蔵文化の解明に著しい成果を挙げて居るのは周知のことであります。

しかし其の発掘の多くは、道路建設や土地造成等各種の開発事業に依って消滅する遺跡の緊急調査であることを思うとき、誠に寒心に耐えないものがあります。

我が甲西町においても其の例にもれず、開発の波は徐々に押し寄せ、埋蔵文化財の包蔵地は、其の調査を待たずして破壊の危険に曝されて居る現状であります。

本町、教育委員会に於いても此のこととに着目し、過去数回にわたって、文化財包蔵地の調査を行い、其の対策に腐心して來たのであります。

本町及び其の周辺の農耕起源に付いては、西暦紀元前後の頃、西日本方面より漸次、稻作農耕が伝播し、我々の遠い祖先達は、扇状地先端の湧泉列の上に点々と集落をつくって定着し、湿润地に水田を開拓して、古代農耕社会を営んで居たものと考えられて来ました。

今回の住吉遺跡の発掘調査に依って其のことが実証され、住居址や遺物などが現実に町民の眼に確認されたことは、意義深いことであります。又、從来、未調査地区であった釜無川以西の旧西郡地区においての最初の学術的発掘調査であり、中巨摩西部の埋蔵文化の解明に曙光を見出す結果となったことは、真に重要な意味を持つものと確信するものであります。

最後に、本遺跡調査に当って終始、厚い御指導を賜った新津健氏をはじめ、県文化課の係官、町教育委員会、文化財審議会、文化協会郷土研究部等、各層各位の絶大なる御尽力に対し深甚なる謝意を表し、巻末の記と致します。

住吉遺跡発掘調査団構成表

團長	清水 千春(町教育委員長)
副團長	杉山 松雄(町文化財審議会会長), 野田 幸雄(町文化協会会長)
	古屋 兼雄(町文協郷土研究部長), 田中 達哉(町教育委員)
	新津 史郎(町教育委員)
團員 (順不同)	井上 栄一, 深沢 嘉甫, 早川 義人, 大久保道男, 今井 定市, 深沢 熊藏 藤巻 信, 大久保利十, 市川 文藏, 依田 清文, 飯塙三千雄, 西海 能齊 深沢 庫太, 有泉 錄三, 大木喜八郎, 野沢 肇, 望月 勝江
參与	淡路 一朗 町長, 石川 晃 議會議長 橋口 主一 教育長, 志村 正幸 (前)教育長
事務局	教委事務局副主幹 塩沢 忠
調査員	新津 健(日本考古学協会会員), 新津 茂, 八巻与志夫, 山下 孝司
補助調査員	日向 千恵, 畑 大介

住吉遺跡発掘調査活動従事(協力)者

(順不同, 敬称略)

町内関係者

杉山 松雄, 井上 栄一, 野田 幸雄, 深沢 嘉甫, 早川 義人, 清水 千春
大久保道男, 今井 定市, 深沢 熊藏, 藤巻 信, 大久保利十, 古屋 兼雄
石川 晃, 市川 文藏, 新津 史郎, 田中 達哉, 依田 清文, 飯塙三千雄
西海 能齊, 深沢 庫太, 有泉 錄三, 大木喜八郎, 野沢 肇, 望月 勝江
石川 仁, 野沢 和義, 大久保幸雄, 村松 芳平, 小泉 豊

町教育委員会職員一同

調査地提供者

甲西町荆沢 長沼工業所 (長沼 建夫)

町内協力機関, 団体等

甲 西 町 (町長 淡路 一朗)

甲西町教育委員会 (委員長 清水 千春, 田中 達哉)

甲西町文化財審議会 (会長 杉山 松雄)

" (委員 井上 栄一, 飯塙三千雄, 藤巻 信, 望月 勝江)

甲西町文化協会 (会長 野田 幸雄)

甲西町郷土研究部会 (部長 古屋 兼雄)

大井農業協同組合 (組合長 佐久間忠大)

古 市 場 区 (区長 深沢 熊藏)



鉄入式スナップ

。積りたる土除かれて遠つ世の
み祖の住みし跡あらわなり

。直土に藁敷きのべし家床に
飯食す様の思ほゆるかも

松
雄

郷土史読本第1集

住吉遺跡

——弥生時代集落址の調査——

発行 昭和56年3月20日

編集 住吉遺跡調査団

発行 甲西町教育委員会

印刷 第一法規出版株式会社
